

はじめ

村田修子

お茶の水幼稚園の庭には、ずっと以前から敷きつめられている小砂利が歩くと相変らず足の下でなっています。

はじめてこの先生になったとき、庭じゅう石が敷きつめてある、ということは、学校の運動場という概念からは考えられないことでしたから本当に驚きました。

それも今よりはもっともつと厚く敷かれていたので、子どもたちと一緒に走るとぎくぎくと砂利が崩れるので足が流されて、すこしもキックがききません。

運動は一つの態勢から次の態勢へと

移っていくその動きがリズムミカルで、

何の抵抗もなくスムーズに、そのリズムを崩さないで連続することによってよい運動、美しい運動、記録的にもすばらしい運動が行われるのです。ですから走っている途中で足がすべって、

十入れた力が六ぐらいの効果しか持たないのでは、運動するものにとって快いものではありません。走っている途中でその状態になりますと、思わない筋肉や腱に負担を感じます。子どもたちも鬼ごっこするときなど、もうすぐ友

だちをつかまえられる状態のとき力が入ったために、うしろにキックした足

がすべってスピードが急に落ちてその機会を失っていることなどをよく見かけました。

どうして石なんかあるのだろう、といつもいつも思いました。けれどもときがたつにしたがって、石の落着いた色に安定感を覚えるようになりました。まして、雨のあとのきれいに洗われた石の色を本当に美しいと思えました。

石は丸くなっていますから思ったよりがはななのですが、たまにころんと膝にきずができたときなどに改めて砂利が敷いてあることを思い出すようになりました。

そして更に、雨上りにも、また冬の霜どけの時期にも、晴れてさえいれば年中庭で日光に当たって遊べるので、先人のこの知恵に感服するようになって

て、そして砂利の敷いてあることが少しも不思議ではなくなりました。

砂利はだんだんに下に沈んでいくので、以前ほどの厚さがなくなつたせいもあるかもしれないが、走るときの抵抗感についても、足を使うことの少なくなつた現代ではかえつてよい影響を与えているかもしれない、などと今では勝手に都合のよいように考えています。

このようにはじめは大変だと思つたり、感じていた事柄が、ときがたつにつれて余り感興を持たなくなつてしまふ、ということ世の中にはたくさんあると思います。ところが、このはじめに感じていたことが、何とも感じなくなるほど生活の中にしみ込んで、つけ込んでしまうことが幼児には必要だと思ひます。

この砂利庭にある砂場の道具入れの屋根の上に、黄色い柄のかねのスコップが毎日並べられています。ときには砂だらけのこともあります。大抵はきれいに洗われて干されているのです。これは五歳児の一学期のなかばごろに、かねのシャベルで砂を掘つたときのさくさくという感じを味わせたい、という気持ちから、「今度こういうシャベル出ますから大事にしましうね」と五本出しました。その日の帰り前に誰いうとなく「これきれいにして干しておこう」ということになつて、それ以来そうすることが当然のこととしてずっと続いているのです。

こんな小さなことからしても、幼児の場合が一番はじめの印象がとも強いのです。ですから入園当初の指導が大切である、といわれるのです。この

時期は教師は大変に忙しくて心を休めるひまはありません。自由に動き回る子どもたちの特徴を、何かにことよせてつかまえて名前を覚えることと、つぎつぎとへやに入ってくる子どもたち一人一人に話しかけながら、水道のところに一緒に行つて蛇口をひねつては手を洗い、手ふきのかかつているところの名前を探しては手のふき方について話しながら手をふき、口に水を含んではガラガラとうがいをするなどの個人指導を何回も繰り返しながら、今までのがしては習慣づけをすることはできなくなる、と自分にいきかせながら、はじめの大切さと共に忙しくすすのです。

(お茶の水幼稚園)